

---

短編 『何もしない日』

芙美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編 『何もしない日』

### 【Nコード】

N0784W

### 【作者名】

芙美

### 【あらすじ】

何もしない休日の話。寝てばかりです。本当にそれだけの、日常的な話です。

何もしない一日の始まり。

目が覚めて、私はぼんやりした頭でもそもそと動き、布団の中で携帯電話を見た。

時間は六時、いつもなら寝ている時間だ。休日に限ってこんな早くに目を覚ますのは何故だろう？

今日は時間を気にせず寝ていられるのに。

私は寝ていたい、何もしたくないのだ。

こんな早い時間、お話にならないよ。と、目を閉じる。  
私はすぐに眠りについた。

夢を見る。

ぴよん、ぴよん、ぴよん。

夢の中で私はぴよんぴよん跳んでいた。

現実同様、夢の中でも何もしたくない気持ちでいたが、まあこれくらいなら『してもいい』の範囲内なのだろう。

とにかく私はひたすらぴよんぴよん跳んでいた。

次に起きたのは十一時。びくつと体が跳ねた勢いで壁に頭をぶつけて目が覚めた。眠いと痛い<sup>ミズ</sup>が混ざり合う。見てみると布団がめちやくちやになつていた。

ベッドの横に用意しておいたバナナを、布団にはいったまま食べる。

ずっと布団の中にも不自由のないように、準備は寝る前にしてあった。

気だるいな。よし。まだ寝れそうだ。

眠気がまだ十分体を満たしている。そのことが嬉しい。

食べながら少しうとうとした私は、バナナを口に入れ損ねて、鼻にぶつけてしまった。鼻がちょっとひんやり。でもそんなことでは眠気はさめないのだ。

最後のバナナの欠片を飲み込むか飲み込まないか、そんな中私はまたも眠りについた。

今度は私は横になったまま転がっていた。文字通り、コロコロと起伏のない平坦な場所にいたのに、私はどこまでも転がった。景色が目まぐるしく変わる。ぐるぐる回って周りの風景なんかひとつもわからない。色とりどり、様々な形の物がぐるぐるになって通り過ぎ、回りながら私は「なんだこれは」とつぶやいた。そこで夢から覚めた。

『なんだこれは』

夢と同じ言葉を心の中でつぶやいた。

夢の中で私は何もしていなかったが、それなのになんだか色々あった気がして、ちょっと疲れた。色彩豊かな景色のせいだ。ああ、なんとも楽しい悪夢であった。

時間はもう昼の一時半。おなががすいたので、側に置いておいたパンをほおばり、ペットボトルのお茶を飲む。

上半身だけ起こして、枕元の壁によりかかりながら、ゆっくり時間をかけて咀嚼して食べきった。

ふう、一息つく。

まだ寝れるか？

私は自分に問いかけた。

まだまだ私は、何もしたくない。

それなのに、覚醒してしまった。大丈夫だろうか。答えを探すために目を閉じる。

……うん、寝れる。

さっきの眠りが中途半端で、まだ余力があった。薄くなった眠気

が体のあちこちにちらばっている。

きつと寝れると自信をつけて、私はもう一度布団にもぐりこみ、意識して力を抜き、ゆっくり呼吸をする。

私は再び眠りについた。

気が付くと、私が布団の中にいた。

私は柔らかい布団に包まれて、眠る。眠りの中に落ちていく。

そんな私の様子を、私は見ていた。部屋のどの位置にいるかもわからない。ただ私は見ていた。

やがて、眠りに落ちた私と見ている私の意識が混ざり合い、吸い込まれて夢の中へ。

夢の中では、私が布団の中にいて、そんな私の様子を見ている私もいる。

布団の中の私が眠り、見ている私の意識と混ざり合い、夢を見る。そしてまた夢で、布団の中に私がいて、それを見ている私がいて、眠り、混ざり合い、次の夢へ。

布団の中の私も見ている私も、夢から夢へと渡っていくが、結局は何もしていない。

お互いの役割をこなしているように見せかけて、十センチも動いていないし、ひとかけらも考えていない。

ただ漠然と繰り返し、混ざり合う。何度も、何度も。

夢は、形が変わらないまま薄れて、いつの間にか消えていた。

ぱちり。目をさます。

時計を見ると四時。

四時？結構深く眠った気がするのに、そんなに時間が経っていなかったのか。そう考えて外を見ると暗い。四時なのに。とうとう、世界が終わったのか。

私は心地よい混乱を経て、すぐに今が早朝だということに気づく。朝の、四時！

私は思い切り伸びをした。

よく眠ったもんだ。

寝すぎて少しだるいけど、もう起きよう。

残ったパンをほおぼって、お風呂に入って着替えたころには、外が明るくなっていた。

鳥の声が聴こえる。

なんだか楽しくなって、ニヤニヤしてしまう。

そうだ、早朝の誰もいない町を散歩に出かけよう。

私は靴をはいて外にでた。

こうして私の、何もしい一日は終わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0784w/>

---

短編 『何もしない日』

2011年10月7日18時26分発行